

# Romantic Capri



初めましての方も、そうでない方も。 こんにちは。  
四神夏菊(よがみなつき)です。

今回は記念雑誌【ロマンティック・カプリ】を手にとって頂き、ありがとうございます。  
こちらの雑誌は始めて着手した事もあるのですが、ここまで自分の電子書籍がダウンロードされるとは思ってなかった。

プラス

何かその嬉しさの記念となる物を作りたくて、ファンブックの記念すべき『創刊号』を作らせていただきました。

正直言って、これを書いている今でも動揺を隠せません^^；

さて、今回はそんな記念すべき1回目の【ロマンティック・カプリ】は。

『冬は凍てつく風のように』の、ダウンロード数が10部を突破した記念内容となっております。

中身がどんな感じなのかはちょちょいと書いてありますが、気にせず次のページをめくって下さいね^^

ではでは、ちょっとしたものの詰め合わせですが。

楽しんで行ってくださいね☆

## 物語の制作秘話

---

『冬は凍てつく風のように』

MGG(ミドルガーデンガーディアンズ)シナリオ 第2期・3作品

【冬の季節】を題材に書いた物語

こちらの作品を書いたのは、自分が高校2年生の頃。

当時は『ファーストキャラクター』という異名もない、数少ないオリジナルキャラクターに愛着が沸く前ですね。

『ストレンジャー・ザ・ドラゴン』の友人ポジションであり、彼と同じ『四神(しじん)』をモデルにした子達を制作。

彼女はそんな四神の北を守護する『ゲンブ』をイメージして創りました。

そんな彼女をメインとしたシナリオで、この物語の大半は『カジノゲーム』で構成されています。

彼女の趣味が『ギャンブル』と言う、ちょっと子供っぽくないモノだったので(笑)

全オリキャラの中でダントツの、強運の持ち主です。

なので、普通に買っちゃうんですよね^^ ; 怖い怖い。

物語の舞台となるのは、オリジナルの世界観である『テトラクリスタルアイランド』

そして、当時のGCゲームである『ソニックアドベンチャーDX』に登場する『カジノポリス』の雰囲気を使用。

なので、作中に登場する『ミスティックルーイン』は、そのままの風景だと思って下さってOKです。

まだまだ小説を書き始めたばかりだったため、二次創作交じりですね(笑)

また、当初の頃の物語には。

一部を友人にお願いして、デザインしてもらった服装を着用しています。

今回の『ビリーブ』さんが着ているコートも、デザインしてもらった物をアレンジ。

私服の乏しいソニキャラに見合う、可愛らしい服装となりました。

作中のカジノゲームは、個人的な勝率ぼんぼんと言うより、リターン制の強い『ブラックジャック』を押させてもらいました。

いろいろとネットゲームでも遊べるカジノゲームは、やっぱり勝率はいろいろですからね。

個人的に結構勝てるのがこれとポーカーだったので、押しに押してます。

人によっては『スロットの方がいい！』とか『いや、あえてのミニバカラだろ』とか言われても、全然反論できません(笑)

ギャンブルは本当に運ですからね^^ 後、ディーラーさん。

そんな感じで、楽しい雰囲気を楽しんだ。

友人を助けるための、協力ストーリーとなっております。

## ジョイの制作裏話

---

『ジョイ・スコール』

通称 ジョイ

種族 玄武

性別 女

年齢 10歳

背丈 95cm

重さ シークレット

好物 魚介類

特技 銃技 ギャンブル 水上歩行

趣味 水泳

所持武器 トランプガン 槍

必殺技 アクアギャンブルス

対地上戦遠距離多数攻撃用アビリティ 属性 水

トライブパワー 水との干渉召還術 癒しの力

名前の由来 喜び

彼女は自身がオリジナルキャラクターを創りだして、4人目となる女の子のキャラ。

ベルミリオンの次に来る女子キャラですが、当時はここまで可愛い顔をしていませんでした(笑)

雰囲気的なイメージは『エミー・ローズ』を参考にしていますが、今ではムードメーカーと言うより、姉御ポジション。

年下のキャラ達から慕われる、お姉さん格ですね^^

当時のキャラクターモデルは『幻獣』だったため、亀と蛇をイメージしたキャラを検討しました。

が、やはり亀と言うのは『雄』を連想させるポイントが幾つかあり、背中に甲羅って言うのが一番大きかったかな。

主に『ノコ〇コ』とか『〇ッパ大王』とか(笑)

なので、思い切って『女の子にしてみよう』と、思い立ったのが始まりです。

当初はエミーと同じく『バンダナ』と髪留めを付けていましたが、前述同様『可愛くない』と自身でも思うほど(涙目)

そのため、部品もろもろは取っ払い、可愛さを押すため髪留めを『花』に変更。

服装も思い切ってギャルギャルさせるため、当時の自分も含めて『女子高生』という路線になりました。

リボンタイとブレザーと言うのが、結構はまりましたね。

甲羅をイメージしたスカートも中々マッチし、表情は回数を重ねるたびに今の顔に近くなりました。

と言うより、もっと図鑑とかを見て研究すれば良かったんでしょうね・・・^^；

破棄した紙が多かった記憶もあります。

靴は当時からデザインと物を変える思考があったため、彼女は服装と似合う『革靴』をイメージ。

そして服装アレンジを何度か加えるにしたがって、『ギャル女子なお姉さん』という路線になりました。

当時から武器は『槍』でしたが、基本武装は『トランプ銃』です。

つい先日までアニメをしていた『怪盗〇ツド』が使うアレを、まんま参考にしました。

まだ正式なデザインは決まっていない+造りが把握できていないので、デザインは未定です。

基本的に現実味のある服装や武器の造りにするため、そういう所は現実的なものかもしれません。

『頭の中はお花畑』と言われながらも、『現実的な思考の持ち主』という友人から自分へ向けたイメージは、9割近く合っている気がします(笑)

そんな彼女、実は当初数回だけ行っていた『オリジナルキャラクターコンテスト』では、比較的ビリを取っていました。

今回のダウンロードが何を切欠に行われたかが解からないのですが、もし彼女のお話が面白かったと言う事でしたら、きっと彼女も喜ぶと思います^^

ぜひぜひ、これからも応援してくださいね。

# ジョイ・私服Ver

Joy・Scoabe

◦スラングワードファッション

★フレザータイプ  
の制服イメージ



女子高生をイメージとしたフレザータイプの洋服

# ジョイ・式服Ver

y. Scoobe

ハイファッション  
(ケンダ)

柔らかい生地を使用

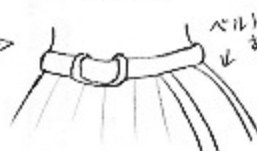


POINT!



↓  
柔らかい布のため  
下に白がる

POINT!



ベルト下に  
ぶら



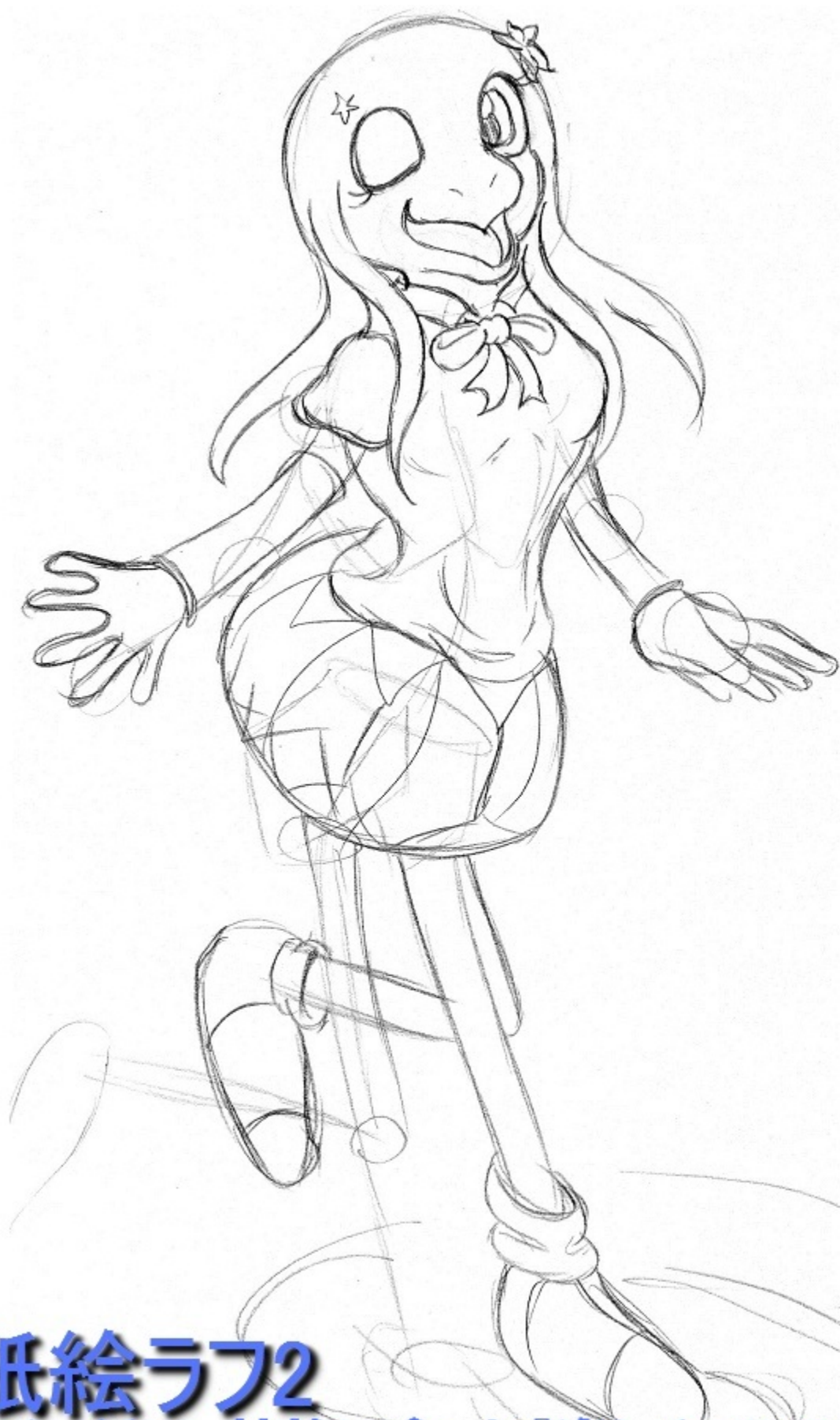
ストレンジャー達とお揃いで、柔らか素材重視の式服ドレス



霧田氣重視で1枚

表紙絵ラフ1





**表紙絵ラフ2**  
前のイメージに、性格に合った「楽しさ」をプラス

前のイメージでバストアップするも、失敗し断念 \ ( ^ 0 ^ ) //



若干投身ミス(涙目)

表紙絵ラフ3



最終的に「イメージング」の雰囲気参考に、できました

イメソ  
いきものかかり  
じょいふる



表紙絵ラフ決定版

## おまけ 『僕の初めてのお洋服』

---

時間は昼を過ぎ、夕方を迎えるにはまだ早い太陽の時間。

僕は島でお世話になっているストレンジャーさんの友人、アルドールさんとピスフリーさん、ジョイさんと共に近くのデパートにやってきました。

どうしてこうなったのかは、僕でも解らないけれど・・・

あの時のお買い物は、僕の欲しい物を買えた。

そう思える時間でした。

### －僕の初めてのお洋服－

お話の時間軸は遡って、ピーチ姫が主催する『カジノナイトパーティ』が行われる当日のお昼過ぎ。

ソニックさんの持つ音速の足のおかげで参加登録をする事が出来た僕達は、僕が持っていない『正装』を買いに近くのデパートへと向かいました。

本当なら僕が御留守番をして、ストレンジャーさんを入れた6人でテイルスさんのために行動すると、僕が勝手に思い込んでいたんです。

だからちょっと、驚きと動揺がその時はあったんです。

「さーてっと、何にしましょっかねー」

「都会のデパートとか、本当新鮮だよな。」

「台詞が田舎臭いわよ、ピスフリー」

「悪かったな、田舎育ちで。」

エミーさんに連行される形でソニックさん達と別れた僕は、ジョイさんを先頭にオリエンタルシティにあるデパートへとやってきました。

どちらかと言うと百貨店とは違うその場所は、大人から子供まで様々な年代の人達が楽しそうにお買い物をしています。

地下には食品街、上にはお洋服や雑貨屋さんと、見ているだけで一日を過ごせてしまいそうなそんな場所。

僕はとっても、新鮮な所でした。

「うわぁ・・・ いろんな物があるんですね・・・」

「ビリーブは、こういうところ初めて？」

「あ、はい。 お父さんやお母さんとは、いつもお家で書物を読んだり遊んだりはしましたけど、遠出をする事が無かったので。」

「じゃあ、初めてなのね。 楽しいわよーこういう場所は。」

「そうなんですか？」

僕よりも年上のアルドールさん達は、デパートの様にたくさんのお店がある所に行った事は何度もあるみたい。

どちらかと言うと皆さんよりも僕の方が『田舎育ち』と言うか『お寺育ち』なので、流行とかファッションとかは疎いのかな。

いろいろな色や生地で作られた洋服を視ているだけで、何だかとってもウキウキします。

「とりあえず服を買うとして。 ビリーブって、何か服とか着た事ある？」

「小さい頃は、良く着ていました。 お爺さんが用意してくれた物を。」

「えっ、どんなの？」

「着物ですよ。 女の子用の。」

「えっ、女子の！？ 何で！？」

「えっと・・・ 確か、僕が大人になっても元気に過ごせるようにって言う・・・おまじないの一種、だったと思います。」

「へ、へえー・・・」

とはいえ、僕の今までの服への感じ方は少しずれているのかなって、思いました。

僕は小さい頃に女の子用のお洋服を着て過ごしていて、可愛い可愛いって育てられてきました。一昨年くらい・・・ そう、丁度僕が1人修行を開始する前まで、その恰好で居たんです。何も変だとは思わなかったのですが、どうやら着ている服はやっぱり性別に合ったものが良いみたいですね。

お爺さんが僕のためにしてくれた事なので、今は気にしていません。

おかげで独りで修業をこなせて、今では立派な狛犬の1人と成れたんですからね。

「ま、まあそういう事ならちゃんと男の恰好させてやらねーとな・・・ うん。」

「そうね。 そしたら、とりあえずあっちに行ってみましょっ」

「はい。」

そんな僕の昔のお洋服の話をした後、僕達は歩きだし奥にあるお店を見に行きました。

最初に向かったのは、カジュアルなお洋服が沢山あるお店。

ポップなカラーの物からシンプルな物まで、たくさんのお洋服を来たマネキンさん達に出迎えられながら、お店の中へ。

すると、

「んー こういうのとかどう？」

「これ、ですか？」

早速ジョイさんはお洋服を見つけてきてくれて、僕に勧めてくれました。

持ってきたのは若葉柄のシャツと白い薄手の上着で、サイズは僕にピッタリの涼しげなお洋服。

「何だか涼しげな感じですね。 お洋服の生地も薄めで、着やすそうです。」

「でも、それを着るのって夜でしょ？ ちょっと寒いんじゃない？」

「そう言われてみればそうね。」

でもこれを着る予定の時間帯には、確かに少し肌寒そうな恰好。

当時の僕は着るお洋服とかは無かったから、寒いとかそういうのは気にしなかったんですが、僕の事を心配してくれている優しい気遣い。

僕には居なかった、お姉さんとお兄さんが出来た感じになって、ちょっと嬉しかったです。

「んじゃさ、こういうのはどうだ？」

「どれどれ？」

そんな僕の所にやってきたのは、ピスフリーさん。

持ってきたのは蒼いジーンズタイプの生地を使ったハードな物で、先ほどの寒さをカバーしてくれるピッタリの物。

サイズは少し大きめですが、手が出るので問題は無いかなって思いました。

「んー でもそれって、正装じゃないわよね。 アタシが言っちゃダメだけど。」

「まあ、確かにな。 さっきのシャツじゃ全然だし。」

「結構難しいわね、洋服選びって。」

「そうですね。」

でも今回のお洋服も、夜のパーティに向かうには少し不向きなお洋服。

正装とは言い難いため、皆さんが持ってきたお洋服は何度か僕に合わせられるも、買う事はありませんでした。

その後も何件かお店を回るも、なかなか僕にピッタリのお洋服は見つかりません。

「案外難しいわねえ、男の子のお洋服選びって。」

「正装だし、普通にスーツとかで良いんじゃないか？」

「そんな事言ったら、今度はピスフリーが浮いちゃうわよ？ シャツに短パンだし。」

「コレは俺の正装だつーの。」

「知ってるわよ、そんな事。」

皆さんは僕のために一生懸命選んでくれましたが、中々僕に似合うお洋服と言うのは見つからないみたい。

楽しげな雰囲気少しずつ変わって行って、ちょっとだけ僕は申し訳ないなって思ってしまうくらいで、やっぱりお留守番の方が良かったかなって思ってしまう。

ストレンジャーさんは皆さんと同様に式服を持っているので、お洋服選びをしなくても済むんじゃないかな。

皆さんが僕のためにお洋服を購入するお金だって、タダじゃない。

いろいろと考えてしまうところは、僕の悪い癖かもしれません。

子供なら素直に、欲しい物が欲しいって言えるくらいじゃないとなつて、思います。

『・・・何か、僕も欲しいって思うお洋服を探した方が良いですね。皆さんに選んでもらってばかりで、僕は何も言えてない・・・』

「・・・？」

そんな風に思っていた時、僕の眼にある物が映り足を止めました。

僕が見つけたのは先ほどまでのカジュアルな雰囲気のお店とは違い、少しフォーマルな洋服を取り扱うお店。

そこに立っていたマネキンさんが着ていたコートが、僕には少し違った雰囲気に見えたんです。

何でかは、良く分かりませんが・・・

「・・・」

「・・・ん？ ビリーブ、どうしたー？」



「あっ、ごめんなさいっ」

お洋服を視ていると、前を歩いていたピスフリーさんが僕に声をかけてくれました。気付いたら僕は皆さんとの距離が開いていて、迷子にならない様になって気遣ってくれたんだと思い、僕は慌てその場を走りだし、皆さんの元へ。駆け寄っている際も皆さんは待っていてくれて、僕が来てから再び歩き出してくれました。

「何か気になる物でもあったか？」

「いえ。 まだ、特には・・・」

「そっか。」

でも、僕はやっぱり素直にはなれていませんでした。

「にしても、どうしようかしらねー ビリーブの服。」

その後僕達は、デパートの一角にある喫茶スペースへとやってきました。ジョイさんが僕達の飲みたい物を買ってきてくれて、いろいろ歩き回って疲れた足に休息の時間をくれたんです。僕が頼んで買ってきてくれた緑茶は、今でも覚えています。

「だなー こういう時にストレンジャーが居てくれたら、結構決まりそうなんだけどさー」

「案外センスなかったしね、アタシ達。」

「で、でも服装は可愛い物が多かったわよ？ ピンポイントじゃ無かったけど。」

でも、僕もそろそろお洋服を決められるくらいにならないと駄目なんじゃないかなって、その時は思っていました。

皆さんが選んでくれたものを着ている事は良い事とも言えるけど、僕が自分で選べないのは良くない事。

お父さんもお母さんも、僕にいろいろな事を教えてくれて、後を継ぐ事も踏まえてたくさんの経験をくれました。

だけど僕が不思議に思ったり、困難にぶつかった時は、決まって僕に考えるように言ってくれました。

もちろん、全部が全部僕が答えを出せたわけでは無い。

だけど何時だって、その答えに対しお父さんとお母さんは正しい所も正しくない所も、ちゃんと

僕に解る様に教えてくれた。

だから、なのでしょう。

僕はただ、言い出せないだけなんだって。

それを皆さんが決めてくれたら、それで良いんだって思っていたんです。

「・・・」

「やっぱり、ストレンジャーにも来てもらう？」

「でも、テイルスさんの看病もあるし・・・難しいんじゃない？」

「なら電話とかは？ それなら出来ると思うわよ。」

「何を聞くの？」

「そりゃあもちろん、服だけど・・・　　・・・あーでも、根本的な所は内緒だったものねえ。」

「・・・」

だからこそ、僕も何かしないって思ったんです。

ストレンジャーさんは確かに皆さんの事を支えてくれる、僕達よりもとっても強い人。

でも、何時までも頼ってばかりは駄目なんです。

「あっ、あのっ」

「？」

「僕・・・ ストレンジャーさんに、聞いてみたい事があるんです。 良いですか？」

「・・・それは良いけど・・・　じゃあ、コレ。 番号ね。」

「あっ、ありがとうございます！」

僕は勇気を出して、皆さんにお願いをしてみました。

何を聞きたいのかは僕も良く分かってないけど、僕の考えを解ってくれるかもしれない。

皆さんに聞いても良いけれど、これ以上何かを考え込ませたくない。

そんな気持ちを察してくれたのかは解りませんでした。 ジョイさんは僕にストレンジャーさんの家の番号を教えてくださいました。

同時に電話用のカードも貸してくれて、僕はお礼を良いながらお辞儀をし、近くの電話スペースへと駆けて行った。

ジーコ、ジーコ、ジーコ・・・

「・・・」

緑色の黒電話にカードを差し込み、僕はダイヤルを回しました。

すると受話器の奥で呼び出し音が数回かかり、しばらくして着信音が変化しました。

ガチャッ

【はい、もしもし。】

「あっ、ストレンジャーさん・・・ 僕です、ビリーブです。」

【ビリーブ、どうしたんだ？ 皆と一緒にだと思ったんだが。】

「はい。 ジョイさん達が、僕のためにお洋服を買ってくれるって言ってくれたんです。 今はオリエンタルシティのデパートに来ていて、それで・・・ あの・・・」

【・・・何だ、聞きたい事があるのか？】

「は、はいっ・・・ ・・・今、大丈夫ですか・・・？」

【ああ、平気だぜ。 何だ？】

「実は・・・」

電話の先で出てくれたのはストレンジャーさんで、僕の声を聞いて心配そうにするも、何か話したい事がある雰囲気を感じてくれました。

その言葉が少し嬉しくて、僕はストレンジャーさんにお買い物で悩んでいる事をぶつけ、ストレンジャーさんの考えを聞いてみました。

自分の考えを聞いてもらったうえでのアドバイスだと、僕も気持ちがスッキリできる。

そう考えたからです。

【なるほどな。 確かにそれだと、ビリーブ本人も洋服がどれが良いかって言うのは、解りにくくなるかもな。】

「・・・」

【皆がビリーブに洋服を着せたいって気持ちは、俺もなんとなく解る。 ビリーブは俺達の友達だし、皆と仲良く楽しめる場所に行きたいなら、皆揃ってオシャレをしたいだろうからさ。】

「そう、ですよな・・・」

【でも、俺は着てみたい服って言うのは着てみた方が良いと思うぜ。】

「着てみたい服・・・ですか？」

【ああ。 なんとなくだが、ビリーブ。 気になる服があるんじゃないのか？】

「・・・」

話を聞いてもらい、ストレンジャーさんは最終的に僕に着てみたい服がある事を見破りました。それには少し驚く僕でしたけど、不安に思っていた気持ちが気付かない内に言葉になっていて、ストレンジャーさんがそれを悟ってくれたのかもしれない。

居候している家で一緒に居るストレンジャーさんは、僕の事をいろいろと理解してくれていたんだと思います。

ほんの少し、その言葉が嬉しかったです。

「・・・実は、1つ気になった服があるんです。 さっきまで見ていたお店とは、随分違う雰囲気だったのだから・・・似合うかどうか・・・」

【どんな感じの服だ？】

「茶色い、厚手のコートみたいな感じの服です。 襟も付いていて、ボタンも。」

【トレンチコート・・・みたいな奴か。 茶色なら、ビリーブの顔色と合わせても濃さで雰囲気が変わるかもな。 でも、正装にはピッタリだと思うぜ。】

「ピッタリ・・・ですか？」

【ああ。 俺が見たわけじゃないから、はっきりとは断言できないけどさ。 もし仮に着てみて、何か足してみたいって思ったら俺が何か貸すぜ。 その服、着てみなよビリーブ。】

「！！ はいっ！」

それから話をしているうちに、ストレンジャーさんは僕にその服を着てみなよと勧めてくれました。

見た事のない服を僕の説明だけで解ってくれたのかは解りませんが、気になった感覚は大切にされた方が良く、僕に後から教えてくれたストレンジャーさん。

何でそこまで思うのかは解りませんでした。僕はストレンジャーさんの言葉に衝撃を受け、その言葉を実行してみたくなり、お礼を述べた後受話器を降ろした。

そしてその場を駆け出し、皆さんの元へ。

「ジョイさん、ピスフリーさん、アルドールさん！」

「？ お帰りビリーブ、どしたの？」

「僕、買って欲しい服があるんですっ・・・！ お願いします！」

勢いもあり、気持ちを素直にぶつきたい。

僕はその一心で頭を下げ、買って欲しい服があると僕は告げました。

すると、

「どんなのだ？ 場所、解るか？」

「はいっ！ こっちですよっ」

ピスフリーさんはそう言いながら席を立ち、どんな服が着てみたいのかと言い、案内して欲しいと言ってくれました。

その言葉を聞いて僕は嬉しくて、反対されなかった言葉のままに、ピスフリーさんの手を握ってお店の元へと向かって行きました。

そして、僕は着てみたいお洋服を買ってもらい、あの時のパーティに向かったのです。

自分の決めた、素直な気持ちで買った、あのコート。

それと一緒に合わせてくれた、ストレンジャーさんのマフラーと共に。

ーおわりー

## 最後に一言

---

一定ダウンロード数突破記念、ファンブック『ロマンティック・カプリ』創刊号はいかがでしたでしょうか。

こちらの本の中身は、いろいろな読者の方々や知人の方々のご協力によって完成したに等しいですが。

少々不慣れですが、楽しんでいただけてたら幸いです。

比較的オリキャラに愛を込めやすい著者ですが、小説もイラストもまだまだプロから見ればアマチュアレベル。

ですが、自分は自分が書きたい物を続けて書いて行こうと思っております。

・・・って、何でこんな所で意気込み書いてんだ自分(笑)

そんなこんなですが、今回の創刊号はここまでとなります。

また次回の部を発行する事になりましたら、ぜひぜひ手に取って下さいね^^

それではっ、またお会いしましょーっ

皆ー！ たくさん読んでくれてありがとうっ♪  
これからも応援、よろしくお願ひしますわっ

